

北海道立札幌医大卒業後、日本電電公社へ入社。昭和35年退職後、函館の病院を経て南茅部町国民健康保険病院リハビリ科にて奉職、平成10年定年退職。現在は、少年少女囲碁教室を開設。

「次世代に伝えたいこと」

私は昭和11年（1936年）北海道函館で誕生した。中学生になった頃から父親がよく口にした言葉は、「将来は外に出た方がいい」だった。それは狭い日本で暮らすより若い時代に外国を見聞しておけば、日本での生活がいかにちっぽけなものにみえるかよく分かるからだ。父親は若い時代に欧米で過した経験があったから、日本人の小さな心の部分がよく見えたのだ。住むなら都、見るなら世界、それが口ぐせであった。

父親が子に託した思いに反して、2歳上の兄は自衛隊に、私は公務員の道を歩いてしまった。あまりにも楽な職場の椅子に長年座りすぎたのか、ヤワな人間になりすぎて歩いて来た人生に足跡を残すこともなく、これといった印を付けない内に定年を迎えてしまった。江戸を知らない田舎サムライのままだったのだ。家訓の世界を見よを忘れ、前も見ず振り返りもしないで隠居じいさんをきめこんで、深呼吸をし終わった時65歳になっていた。私の人生はなんだったのだろう、こんなちっぽけなものだったのか、と、溜め息を洩らした。

3人の子供達はそれぞれ巣立ったけれど、まだ親の羽根に抱えられている時代に、自分達の部屋がほしいという要望に応じて、身分不相応な家を建てて個室を与えたが、年を追って独立していった子供達が残していったものは、大きな家と住宅ローンであった。退職金もポチポチと消え、気がついたとき働かなければ年金だけでは生活が行き詰る、そういう事が切実に感じた。パート労働者として働きに出たのは66歳の夏である。社会に通用する免

許や特技がなかったので、働かせてくれる職種は道路交通誘導員、いわゆる道路の旗振りか夜警のオジサン、掃除夫くらいなものだ。65歳を超えると職場がない。人が嫌がる汚れた仕事だからこそ老人は働かさせてもらえるのだ。

次世代に伝えたい。そんな大袈裟な事は言えないが、せめて30代の息子や同年代の人達に伝えておきたい。私は働きに出て4年になる。これぞとふんぎりをつける時は死ぬ時ではない。70歳になって背伸びをする時である。現代の人生は80歳代と言われるようになった。元気な高齢者は年を重ねる毎に増えつつある。だが、人間にも賞味期限があるのだ。只なにもしないで、なにも出来ないで生きているだけの人生なら、社会のお邪魔虫にならないようにしなければならない。年金も段階的に支給年齢が上がり、そう遠くない日に「年金」という名目がなくなるだろう。だから30代で老後に通用するあらゆる免許を取得しておく事が必要だ。社会に適応する特技も身につけておく事、若いからこそ出来るのだ。頑張れ。家は建てるな。老後に持て余すから、誰もが夢を見るマイホーム、もし建てるとしたならば、55歳までに払い終われる計画を立てて実行するべきである。借金はするな。若い内は万札を預金するのは無理な事だ。小銭を貯める事、目標は一日500円。20年経ったらと、面白い小さな夢を育ててみたらどうだろうか。囲碁は覚えた方がいい、囲碁とは人生によく似た勝負の世界である。基盤の上で361罫の陣取り合戦なのだが、布石のその一手はポツンと取り残された淋しい石だが、やがて勝負を決する要の石になる。上手な人ほど捨て石を使い分ける。人生そのものの世界だ。社会生活の中で相手の捨て石にごまかされずに、相手の意図を読む心と目を養うのも若い内に、ではなかろうか。